



▲調査研究結果発表の様子

様々な分野での取組の推進が提案されました。具体的な取組の方向性として、「スポーツ・健康」、「障がい者」など、オリンピック・パラリンピックを契機に注目や関心が集まる状況を捉えて、それぞれの分野の取組につなげ、レガシーを創出することが提言されました。

その後、事前キャンプ誘致の取組について事例を踏まえた報告が行われ、住民と一緒に、全庁を挙げて取組を進めることにより、地域のレガシーとしていくことが提案されました。



▲パネルディスカッションの様子

3. パネルディスカッション

これまでの講演や結果発表の内容を踏まえ、「東京五輪が照らす多摩・島しょ地域の可能性と展望」と題してパネルディスカッションが行われました。基調講演をされた菊地教授をはじめ、障害がありながらプロのボディボーダーとして活躍されたYUMIEさん、ルーマニア出身で日本に長く在住され、首都大学東京で教鞭をとっておられる佐々木リディア特任准教授、そして地域金融機関の多摩信用金庫で多摩地域の振興に力を注いでおられる長島剛部長の4人のパネラーが活発な意見交換を行いました。

はじめに、パネラーのみなさま方の自己紹介とともに、ご自身の経験等も踏まえながら、多摩・島しょ地域の魅力と地域資源について語っていただきました。



まず菊地教授からは、基調講演の内容を踏まえながら「高尾山のミシュラン三ツ星」に代表される多摩地域の農空間・緑地空間が、世界にもまれな地域として評価されていること。特にそれらの魅力を組み合わせることでより大きな効果を生み出すことが報告されました。

次に、佐々木特任准教授からは、ルーマニアから日本に移住されたご自身の経験を踏まえ、多摩・島しょ地域が外国人に対して開かれ、受容性に富んだ地域であること。また多様な異文化交流、国際交流活動が行われ、すぐ近くに残る里山の資源環境とともに多摩・島しょ地域の魅力となっていることが報告されました。



続いてYUMIEさんからは、2歳の時に両耳の聴力を失うという大きな障害に見舞われながら、ボディボードと出会い、障害と向き合い、克服していった経験や小笠原や八丈島での修行、プロになり世界の試合を転戦したご経験など、ボディボードというスポーツを通して強くなれたご自身の事や諦めない事の大切さなどをお話いただきました。



長島部長からは、多摩・島しょ地域の特徴を分析いただくとともに、多摩・島しょ地域の振興を図る上での課題や今後の方向性について、地域金融機関の視点から解説していただきました。

大会を契機に実現したいこと、そのための取組について議論いただくセッションでは、菊地教授から、世界基準の都市への取組として、誰もが暮らしやすく楽しめるユニバーサルデザインのまちづくりが提案されました。

佐々木特任准教授からは、里山などの身近な自然環境が外国人から見た多摩の魅力となりつつある現状や事前キャンプにおける姉妹都市等の国際交流の活用、より外国人へ開かれた地域にしていくことの必要性が提案されました。

YUMIEさんからは、「障害はひとつの個性」と捉え、「かわいそうな人」「支援をしなくてはいけない人」と画一的に考えるのではなく、何を求めているのか、どのようなサポートを必要としているのかをよく見ること。場合によっては直接相手に聞くことで理解し合えることがあるなど、障害のある方への接し方一つで、障害が障害ではなくなる可能性があること。そうした社会ができれば多くの障害がある方も活躍できる可能性があるとの提案がなされました。

長島部長からは、多くの学生が多摩・島しょ地域に在学しながら、実は、多摩・島しょ地域への就職は少ないという現状を捉え、多摩・島しょ地域のポテンシャルを活かすためにも、こうした人材を多摩・島しょ地域に還流させる仕組みづくりの必要性が提案されました。

最後にコーディネー



ターの山本さんから、多摩・島しょ地域の持つ地域資源を活かし、発展させていくための新たな視点として、「誰もが暮らしやすいユニバーサル社会の実現」とそれに向けた広域連携の必要性が提案され、シンポジウムが閉じられました。

4. リオデジャネイロオリンピック出場選手からのメッセージ



▲特別ゲストの体操女子日本代表宮川選手

シンポジウムの最後には、東京2020大会を盛り上げるため、特別ゲストのリオデジャネイロオリンピック体操女子日本代表の宮川紗江選手からメッセージをいただきました。西東京市出身の宮川選手は、リオオリンピックでの経験を高校生とは思えないしっかりとした口調で伝え、盛んに拍手を浴びていました。今後の目標としては、「今回のオリンピックでは獲得できなかったメダルを東京では是非取りたい。」と述べるなど、東京大会へ向けた決意も明らかにしてくれました。

これからも一生懸命に練習を続けて、是非東京大会で好成績を取って欲しいと一同願っています。最後に当調査会の並木心理理事長（羽村市長）から花束を贈られると、客席に向かって大きく手を振って声援に答えていました。

5. シンポジウムを終えて

2020年の東京大会を契機に、多摩・島しょ地域が更なる発展を遂げることを念頭に、各自治体での取組が一層進んでいくものと強く感じました。